

---

# Parfum

響かほり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Parfum

### 【Nコード】

N3185X

### 【作者名】

響かほり

### 【あらすじ】

榊紫苑は自分の職業（俳優）を隠して、従兄弟である榊健斗のクリニックへ不眠治療に通っていたが、症状は徐々に悪化するばかり。二年間、ずっと自分の診療介助についてくれる年上看護師の吉良は優秀で、それなりに気に入っていて、なんとなく気になる存在。

愛や恋という感情を否定し、女性と深く付き合う事なかった紫苑は、従兄弟の口説きテクすら通用しない吉良に強く興味を惹かれはじめ。

それは恋愛感情ではなく、玩具を手に入れるような、自分にも靡かない彼女を口説き落とす遊びの様な感覚だった…

一方の吉良あげはは、高時給につられた特別診療（榊紫苑の診療介助）で時間外手当をゲットして、儉しく貯蓄生活をしながら恋愛ナシのおひとり様生活を満喫中だった。それが、これまで挨拶程度の口説き文句しか言わなかった榊紫苑の変化により一転。過度なエロスキンシップをする榊紫苑に彼女のアイデンティティは崩壊寸前！榊紫苑への評価はダダ下がり。

そんな二人の間に恋は芽生えるの！？

『Sweet hug』の吉良あげはと榊紫苑が付き合う前のお話。

紫苑と吉良の視点が交互に展開する一人称表記の小説です。

## 1 〽紫苑side〽 (前書き)

二人の付き合う前のお話を、改稿掲載開始しました。  
ゆっくりペースでの更新になりますが、Sweet hugとは  
違った二人を楽しんで居たければ幸いです。

# 1 〔紫苑 side〕

## 第一章 華麗なる榊一族

はじめに気になったのは、彼女の香り。

近付いて微かに分かる程度の、淡いハーブの芳香。

その香りに触れる時だけ、俺は不思議な安息感に包まれる。

恐らくラベンダーと、何かが混ざっているはずなのだけれど、俺にはそれが何の香りかは分からなかった。

ずっと気になっていたけれど、一度も相手に確かめたことはない。彼女に出会って二年になるが、挨拶程度の会話か、必要最低限の会話以外はした事がない。相手も俺も、私情で話しかけるようなことのない仲だ。

相手は、俺が通う睡眠治療専門のクリニックの看護師。

苗字は吉良、名前は知らない。

ケーシーとかいうツーピースのパンツタイプの機能的な白衣の胸元に、そう苗字が書いてあった。

身長は一七〇？前後で、細身だがメリハリのある女性らしい体型をしている。

顔は卵型で、ダークブラウンの目は大きめでくりっとし、睫毛も長い。鼻梁はすっきりしていて、唇は少し厚め。

俺より年齢は四、五歳年上だと聞いているけど、肌理細かく張りのある色白な肌や、幼く見える顔は、どう見ても俺と同じくらいにしか見えない。

容姿を評価するなら、中の上。

顔自体は特に目立った美人ではないし、色気は皆無。

身だしなみには気を配っているようで、化粧品に手抜きはなく、いつみてもナチュラルメイクで清楚な印象を受ける。

まあ、仕事中の看護師に女の色気をふりまかれても困るけど、接客と言うか俺への応対は丁寧で女性特有の媚を売る様な裏が見えない。

徹底して看護師としての立場を崩さず、俺が挨拶程度に口説いた言葉もあっさりかわして、業務をしっかりとこなす。

かといって、つんけんしてもいないし、どちらかと言えば笑顔を良く見せて人を和ませる雰囲気がある。気配り上手で俺は彼女が付いた診療中に不快感を覚えたことはない。

俺が口にするよりも早く、空調一つ、照明一つにしても調節してくれる。かゆい所に手が届く、というのは彼女の様な配慮の事を言うのだろうか。

彼女は一個人としても有能だ。

自分で言うのも何だけれど、俺は女に不自由したことはない。常に言い寄って来る女がいる事に同性から羨望を抱かれる事が多いが、結構、鬱陶しい。

馴れ馴れしく自分を売り込むのはまだいい。

許せないのは、交際していようとしていなくなるのと、節度もなく我が物顔で図々しく俺の仕事や私生活を根掘り葉掘り聞いてくる女。仕事だろうと私生活だろうと、土足で踏み込んでくるような女には嫌悪感しかない。

その点、彼女は何も言わなくても、俺が侵してほしくない絶対領域に踏み込んでこない。

他愛ない会話だけで、俺の事には一切触れて来ない。だから、診療中の居心地は良い。

最近、このクリニックに来ると、いつも彼女の姿を眼で追っつてしまう。

理由は良く解らない。何となく、目が離せない。

「…榊さん、やめてもらえませんか」

呼ばれて、ふと我に返る。

ティーブラウンの短い髪の彼女は、困ったように俺を見下ろしていた。

「あ…俺、何かしていましたか？」

「そんなにガン見なされると、わざと針を刺し間違えますよ？」

治療室の寝台で横になっていた俺は、俺の腕に点滴を刺そうとしていた彼女を凝視していたらしい。

「…わざと？え？わざとって、何？」

なんでもないフリをしているけど、本当は俺、注射の類が大嫌いなんだ。

なのに、わざと打ち損じるつもりなのかと、内心で冷や汗をかいた。

が、彼女は既に点滴の針を刺し終えていて、テープで管の固定も終えて、道具を片付けていた。

痛みすら感じさせない彼女の注射の腕前は、俺が知る医者や看護師の中で一番だ。

いつもながら、手際が良く鮮やかすぎて感服する。

「貴方が少し院長に似ているので、ちょっと苦手というか…日頃の恨みが…」

彼女が勤務するクリニックの院長は、俺の十二歳年上の従兄弟、榊健斗。

兄弟と疎遠な俺には兄貴みたいな存在で、向こうも何かとかまっ

てくれる。

が、天上天下唯我独尊な性格で、女癖が異常に悪い。

彼女は健斗好みのフェロモン系ではないが、プロポーションは完璧に好みの部類だ。

「もしかして貴女、健斗の愛人？」

吉良の形の良い柳眉が片方、ピクリと動く。  
表情が心なしか険しくなる。

“もしかして、地雷を踏んだか？”

俺の想像とは裏腹に、ぷつと、彼女は吹き出し、横を向いて必死に笑いをこらえる。

「ないない」

しばらくして笑いを収めた彼女は、手をひらひらとさせて軽く答える。

いつもは理知的な彼女の顔が、少し幼く見えた。

「院長と出会って八年経つけど…愛だの恋だのって、一度も感じたことないなあ…」

独り言のように彼女の口から洩れた言葉は、いつもの丁寧な口調ではない。きつとこれが素の吉良の喋り方だろう。

「そんなに長い付き合いなのに、何も無いの？」

傍に居る女に手を出さないなんて、正直、従兄弟の手癖からいつて考えられない。

吉良は困った様に首を竦める。

「自分の部下に手を出す様な男の下でなんて働けないし」

そう断言した吉良は、あわてて口元を押える。

「すみません。患者さまに、失礼な言い方を…」

「ああ、気にしないで。俺、堅苦しいのは嫌いだから」

「そういう訳にはいきません」

俺が紳姓だからなのか、吉良は終始言葉遣いが丁寧だ。

医療法人『聖心会』を運営する紳一族絡みの人間は、医療業界の人間にとっては、かなり怖い存在らしい。

『聖心会』というのは、日本でも五本の指に入る巨大総合病院『いずみ病院』が母体となり、福祉施設や老人保健施設などをいくつ

も抱える。

財界人や政界人も良く利用するため、太いパイプもいろいろあるようだ。

事實はどうか知らないが黒い噂もある。

敵に回すと、日本中の病院で雇ってもらえなくなる…とか。

それだけ、『聖心会』が医療業界で力を持っていると、いうことのようにだけ。

従兄弟の健斗が経営するこの榊クリニックも、無論『聖心会』の法人名が付いている。

その『聖心会』の創始者であり、一代で『聖心会』を大きくしたのが、榊虎之助。

従兄弟の健斗と俺の祖父に当たる人で、俺が五、六歳のころに、老衰で大往生ともいえる年齢で亡くなった。

医療系の財閥の出身者で、医者と政界者が多数を占めた榊の嫡子として生まれた祖父は、政界への道には進まず、医者となった。

脳外科医として世界にも名を馳せ、私財で『いずみ病院』を立ち上げ、後継者育成のために尽力し、優秀な医者を輩出したりもした、実はかなりすごい人らしい。

偉大な話をよく聞かされるが、俺の記憶にあるのは、ファンキーなじい様の姿だけ。

ボケたふりをして使用人や自分の子供に悪戯を仕掛けたり、子供みたいに何にでも興味を持って若者の遊びにも進んで参加する。

しかも、ものすごく負けず嫌いで、こと勝負事に関しては、子供相手にもいつだって真剣勝負の大人気ない年寄りだった。

とにかく好奇心と悪戯心の塊みたいな人で、俺はよく遊んでもらった記憶がある。

俺は、じい様が好きだった。兄弟や父親より誰より。

妾腹の子供として肩身の無い場に置かれた榊の家の中で、一番人間らしく俺を扱って、孫として目をかけて遊んでくれた唯一の人間。未練のない榊の家で楽しかった思い出は、ほんの一年だけ過ぎ

たじい様との事だけ。

「…柷さん？」

不思議そうな顔で吉良にみられ、俺は我に返る。

「何か、面白い事でも？」

じい様のことを思い出しているうちに、自然と唇の端が緩んでいたらしい。

俺は表情を戻し、何でもない様に愛想笑いに切り替える。

「いや。貴女は堅苦しいなあと、思っ。もう少し、楽に話したらどう？」

「院長命令なので、仕事中はこの喋り方をやめるわけには…」

「健斗がどうしてそんな命令を？」

「このクリニクに来院される患者さまは、上品な方が多いので、あまり砕けた言葉を使うとクレームが来てしまうんです」

大方、健斗目当てのセレブな女たちだと、容易に想像がつく。

そして、健斗のそばで働いている女性職員に対して向けられる、嫉妬と羨望も。

「健斗がらみで、女性の患者から嫌がらせとかされたことないの？」

健斗の事だ。それなりにそう言った手合いの人間を対処できる人間を置いているとは思っ。

だが、吉良を見て要る限り、失礼とは思っが、彼女が巧く嫉妬を含んだ攻撃をかわせるようなスキルを持っている様にはとても見えない。

「そんな真似を患者にさせるような抜かりが、俺にあるとでも言いたいのか、お前は」

処置室の入り口に視線を向けると、白衣姿の従兄弟が腕を組んで立っている。

切れ長の双眸が、眼鏡越しに不敵に笑っている。

唇の端には皮肉な笑みまで称える。

加虐心旺盛な極悪顔をしているはずなのに、持って生まれた美貌に色気と華を添えるから不思議だ。

## 2 (後書き)

お気に入り登録、評価ありがとうございます。  
急に寒くなってきたので、皆様お風邪など召されませぬよう。

「健斗の目の届かない所であるかも知れないだろ。女なんてのは、影でこそこそするのが好きな人種だ」

「その陰険な人種が、そこにいるぞ？」

従兄弟は吉良に視線を向ける。

俺が彼女を見ると、吉良は苦笑している。

怒りとか不愉快という、負の感情で現れたものではなさそうだ。どちらかというと、呆れている感じだ。

「陰険なんて言っていないだろ」

「なんだ、てつきり吉良が陰険で姑息だと言っているのかと思ったぞ」

「別に吉良さんのことを陰険とは言っていない…」

「ほお？姑息とは認めるのか」

「違うから。吉良さんの事じゃない」

「では、吉良は女ではないと」

「…健斗、言葉の綾で、上げ足を取らないでくれないか」

意地の悪い従兄弟を睨めば、健斗は鼻で笑う。

「院長、私をダシに使って遊ぶのは止めてくださいね。榊さんが困ってますよ？」

助け船を出す様に、吉良が健斗を睨めれば、健斗はにやりと笑う。

「俺も榊なんだがな？」

「もう、すぐそうやって上げ足を取る。悪い癖ですよ」

「そんな俺に飽きもせず八年近く連れ添っているのは、お前だろ。そろそろ、愛でも芽生えただろ。俺に告白でもしたらどうだ？」

「それは連れ添うのではなく、付き合わされている、です。ちなみに、愛じゃなくて腐れ縁で結ばれているんですよ、院長」

聞いている俺が恥ずかしくなる様な誘惑に満ちた声で言葉を投げた健斗に、吉良はさらりとデッドボールクラスの言葉を返し、俺は思わず吹いてしまう。

こんなにあっさり従兄弟の口説きをかわす女性を、俺は初めて見た。

笑った俺を一睨みして処置室に入ってきた健斗は、吉良の手から点滴の道具が入った膿盆を取り上げる。

「吉良、そろそろ約束の時間じゃないのか？あいつを待たせるのか？」

「え？…嘘っ、こんな時間！？大変、遅刻ですっ！院長、私これで失礼します！」

腕時計をみた吉良は、驚いたようにそう言うと俺たちに頭を下げて出て行った。

あの慌てぶりは、デートか。

彼女の背を視線で追いかけて、その姿が消えた直後、鋭い視線を肌を感じた。

視線をそちらに向ければ、健斗がじとりと俺を見ている。

「ナースを口説くなら、よその病院でやれ」

べつに口説いてなどいないが、健斗が本気で注意しているの分かる。

「そんなに大事なら、首輪でも付けて檻に入れておけば？」  
「出来るものならそうしたい所だ」

俺が寝ている診療台の横にある丸椅子に腰を下ろした健斗は、深くため息を漏らす。

そんな物憂げな従兄弟を見るのは、初めてだった。  
そもそも、健斗がその気なら、女はいくらでも落せる。  
気弱な発言自体、あり得ない。

だが、さっきの二人のやり取りを見えれば、吉良には俺達のやり方は通用しないと云うのが分かる。

落とすには、厄介な相手なのかもしれないが、健斗に其処まで言わせる女は、健斗の妻になつた美菜様以来かもしれない。

「何、そんなに吉良さん大事？」  
「当たり前だろ。高い金を払ってあいつを引き抜いたのは、ほかの男に易くくれてやる為じゃねえぞ」

あまりにストレートな発言に、俺は従兄弟を凝視する。  
いまだかつて、健斗がそこまで女に固執したのを見たことがない。  
美菜様の時も無論、固執はしていたし榊の力を使つてもいた。だが、金の力を借りると言うやり方は、健斗にとつては邪道。

吉良のことを気に入っているのは、診察に来る度、健斗の様子を見ていれば分かるけれど、スマートな口説きを重視する健斗が露骨に金銭を動かすのは、吉良に異常なこだわりがあると思えない。

「この俺のペットかつ、有能な仕事の相棒だぞ？どこぞの馬の骨に搔っ攫われるくらいなら、俺の愛人に据える」

その一言に、げんなりする。

言っちゃったよ、健斗の奴。

仕事の相棒よりも先に、ペットって。

健斗にとつての吉良の一番のポジションは、サドっ気を満たしてくれる玩具なのか？

しかも、女とは浅く広く付き合う健斗が、愛人にしても良いくらい、吉良のことは気に入っていると云っているわけだ。

「無論、女に本気にならねえお前にも、やらねえぞ？」

俺にすら、そんな父親的意見で牽制をかけるくらい。

「…吉良さんも、面倒な男に見染められたものだね」

「女絡みのお前は、絶対に信用できない」

「健斗に言われたくないよ」

反論すれば、健斗があり得ないほど嫌な顔をした。

「お前、身を慎め」

身を慎む？

健斗からそんな台詞が聞けるとは、思ってもみなかった。

一番、使わなさそうで、不似合いな人間なのに。

まあ、俺も人のことは言えないが。

「毎回毎回、別の女とのゴシップ記事なんざ撮られやがって。節操なしに女を抱いたりするから、面倒事が起こるんだ。遊ぶ女は選べ。人気落ちてもしらねえぞ？」

珍しく健斗に心配され、俺はその慣れない相手の心遣いに笑ってしまった。

俺の職業は俳優。時々、雑誌のモデルもする。

芸名は“上坂伊織”

一応、それなりに名前は売れているし、この何年か、ありがたい事に休暇を取る余裕すらないほどスケジュールも埋まって、仕事は巧くいっている方だと思う。

世間ではイケメン俳優とか、そんなカテゴリーにくくられている。それも、母親譲りの異国情緒あふれる美貌があったからこそなんだろうけど、親父の血を受け継いでも、それなりに良い顔立ちにはなっただろう。

出来れば、どちらの顔にも似たくなかったというのが本音だが、子供は親を選べないから諦めるしかない。

自分の顔は好きではないけれど、この顔で得をしている事もある

し、捨てられる物でもない。使えるものは利用すればいいと、子供の頃に腹をくくった。

親父にすれば、俺の顔を見る度に母さんを思い出して不愉快になるだろうから、せいぜい有名になってテレビに顔を出し続けてやる。そんな復讐心もあって、この業界を選んだのも今の俺がある理由の一つ。

顔のせいで相手から言い寄ってくるから、女に苦労したこともない。

そのせいか、よくスキャンダル記事を週刊誌に書きたてられる。

「あれは、ほとんど捏造記事。映画の共演者との熱愛は、ほとんど話題づくりのための仕事の一环。手なんか出してない」

「クラブで毎回、女を持ち帰るとかいうアレは？」

「…何、健斗、週刊誌とか読むの？」

妙に詳しい事情を尋ねてくる相手は、ゴシップ雑誌はほとんど読まなかったはずだが。

「受付の絢子が、お前のファンでな。お前の載った雑誌を、吉良と見て話している所を、聞いただけだ」

その言葉に、俺は背筋に嫌な汗をかく。

「…もしかして、吉良さん、俺のこと気付いているのか？」

「さあな。あいつの芸能関係の知識は、無さ過ぎて困るくらいだ。

吉良は仕事以外で人の顔と名前を覚えられない、残念な記憶力だからな。一体どこまで絢子が教えた芸能人を把握したのかは、些か謎だ」

俺としては都合がいいのだが、そつなく物事をこなす吉良にそん

な欠点があるのは、意外だった。

「もつとも、お前の素姓に気付いても、知らないフリを通すだろう。知ったところで、患者の事は一切、他所には口外しない女だ」

「彼女、信用できるのか？」

「俺の選んだ女に間違いがあるとでも言うのか？」

ほかの人間が聞いたら誤解しかねない言葉に、俺は苦笑が浮かぶ。

「女を見る目だけは、認めるよ」

健斗は、人の本質を見抜くのが巧みだ。特に、女性のそれは。

健斗が言うのなら、問題ない。

その辺は信用している。

まあ、吉良が信用に足る人間でなければ、俺の診察に立ち合わせる事など、そもそも健斗はしないだろう。

「で、噂の真相はどうなんだ？毎回、お持ち帰りか？」

そこが気になるのか、健斗は話を戻した。

「いや、持ち帰らないよ。第一、サカリがついているのが多いから、後々面倒くさい。一番、相手にしたくない」

後腐れのある様な付き合い方など一切しないし、リスクは常に最小限に抑える配慮もしている。

どの女とも関係を持つのは一度きり、俺が相手に惚れることは一度もない。

だから交際をしても長くは続かない。そのせいで俺は『恋多き男』という、おかしなレッテルを貼られている。

女が特別好きと言う訳でもない。ただの時間つぶしだ。

最も、最近の仕事の忙しさも手伝って遊ぶ時間どころか眠る時間もない。余計に、不眠症に拍車がかかっている。

仕事をこなすだけの体力維持も、難しくなってきた。

だから、健斗のクリニックに内緒で通って、不眠症の治療をしつつ、時々、こうして栄養剤入りの点滴を打つ。

女を見たら口説くのが榊家の礼儀だが、最近口説く気力もなければ、女と遊ぶ気分にもならない。

けど、そんなことを同族の健斗に言えば、『お前は去勢された犬か』って、突っ込みが来るのも分かり切ったこと。

#### 4 (後書き)

お気に入り登録、お気に入りユーザ登録ありがとうございます

最近、私の天敵花粉が猛威をふるって、マスク生活も相まってかなりの酸欠状態。

なので、一応のチェックはしていますが、誤字脱字などたくさんあるかも…

発見したらメッセージや、活動報告の所からでも教えていただけると助かります。

皆様は、花粉や風邪に負けませんよう、お身体大切にしてくださいね。

それに、これ以上、健斗に迷惑かけるのもまずい。

今ですら、時間も曜日も選ばず、俺の仕事の合間に診てもらっている。

その間隔も最初は月一度程度だったのが、このところ週に一、二度ペースになっている。

健斗は日と時間を選ばない俺の依頼に対して、一切の文句を俺に言うことはない。

性格はサディストだが、意外に面倒見の良い一面がある。

だが、それに甘えてばかりいても、俺の症状が良くなるわけでもない。

「後腐れない女が、一番だね」

「何、飄々と言ってやがる」

「眠れない時間を潰すために、女と遊んで何が悪い？」

「…俺はお前のその発想力が理解出来ん。女と遊ぶから余計に眠れねえんだろっつが」

もつともな意見を放った健斗は、俺の前髪に手をのばして乱暴に掻き乱す。

「女遊びは止める。そのうち、ぶっ倒れるぞ」

「…そうだな。女遊びは少し控えるよ」

一瞬、健斗の表情が険しくなる。

「てめえ、一月くらいは完全に断つくらい言えないのか」

左右のこめかみを押さえるように頭を掴まれ、ぐっと力を込められ、凄まれる。

容赦ない痛みが、俺の頭を襲う。

「いつてえだろ！健斗っ！」

乱暴に健斗の手を振り払い、従兄弟を睨みつける。

健斗は鋭い視線で俺を見下ろしていた。

「医者（俺）の命令が聞けねえのか？それとも、点滴が出来るからって調子乗ってんのか？今度から、俺がまた点滴してやろうか？」

「それだけは、やめろっ！お前、絶望的に下手くそなんだから！」

何度も何度も針を刺されるなんて、たまったものではない。

あんなもの、拷問に近い。むしろ俺を殺す気だとしか言いようがない。

健斗に点滴をされるのは、二度と御免だ。

「吉良以外、絶対、させないからな！」

彼女は注射や点滴が上手い。痛みも恐怖心も感じさせない。だからまだ、許せる。

健斗は俺の慌て様に、皮肉気な笑みを浮かべる。

従兄弟がこの顔をしている時が、一番、生き活きして見えるのは俺だけだろうか。

「随分、吉良を気に入ったようだな？」

「…お前や俺に靡かない時点で高評価。点滴の腕前も申し分ない。」

俺の事をいちいち詮索しない。その三点で、俺の看護師として文句はない」

「女を高評価とは、珍しいな？」

「だからと言って、女としての彼女と深く関わるつもりはない」

「ついでに、他の女をつまみ食いするのも止めとけ。治療の為に、

一カ月、女は抱くなよ？」

「…何で一カ月なんだ？」

「お前にはその辺が、我慢の限界だろ」

「何の我慢だよ」

「性欲」

「…人の性欲限界点を推察するの、止めてくれないか？」

まあ、無駄な体力を消耗しないようにするために、言っていることは分かる。

健斗としても、俺の不眠症が酷くなっていることを、気にはしているのだろう。

だから、体を労れと暗に言っているのだ。

全く、素直じゃない親切なアドバイスだ。

不眠症の原因は、はっきり分かっている。

分かっているけれど、俺自身でも、医者である健斗ですら、それはどうにもならない事だから。

「それでなくとも、真夜中に吉良を引っ張り出すのは避けたい。この界限は、変質者が良く出るからな」

「変質者？」

「露出狂やひったくり程度ならまだいいが、強姦事件もあるからな。夜は出来る限り俺が送迎をするが、そもいかない時がある」

今日の様な昼間ならまだ人目が多いが、夜の一人歩きは何かと危険だ。

俺のせいで吉良に何かあっても後味が悪い。

夜に来るのは、出来るだけ避ける様にするかと思うが、仕事上、飽く時間は夜が多い。

つまり、健斗は遠まわしに俺に診療に来るのを減らすよう、私生活をどうにかしろと言いたいようだ。

「昼に来るよう努力は一応するけど、期待はしないでくれよ」

「どうあっても憤む気がないのか、お前には」

「柗から女遊びをとったら、生き甲斐が無くなるんじゃないのか？」

「あんな…お前に本当に必要なのは、女でも、栄養剤の入った点滴でも、睡眠導入剤でもねえ。心身共に癒される場所だ」

健斗は笑うでもなく、怒るわけでもなく、俺に諭すように呟いた。

俺は、曖昧に笑うことしか出来なかった。

そんなもの、今までに一度だって得た事がないのだから。

## 6 〈吉良 side〉

### 第二章 金が結んだ縁

二年前、その人を初めて見た時、新手の不審者かと思った。

彼の人は、推定一八五？前後の長身で、院長よりも少し背が高い。均整の取れた骨格で、決して華奢ではない体格をしていたから、職場のあるビル内のエレベーター前で隣に並んだ時の威圧感ほむしる恐怖心に近いかもしれない。

服装はパーカーにジーパンというラフな格好。

それだけなら、ごく普通だったんだけど。

深夜の時間帯だというのに、その人は淡いグレーのサングラスをしていた。

しかも、パーカーのフードを目深に被り、伏し目がちで顔を隠している。

エレベーターと一緒に乗り合わせた時、相手は私から顔を逸らし、そわそわ落ち着かない様子だった。

エレベーターに付いている、防犯カメラの映像をちらちら見ているし。

明らかに挙動不審。

しかも、ビルは小規模でテナント数も少なくて病院がほとんど。夜に人が出入りすることは、ほとんどないはず。

それに、相手は降りる階を押ししていない。

その当時、周囲では変質者が出ると、病院に回ってきた回覧板に書いてあった。

“やだ、噂の変質者？どうしよう…院長、もうクリニックに来てる

かな……”

院長に急遽、特別患者を見るから出て来いと呼びだされて来たものの、やっぱり女の一人歩きは危険だったかな。

今日は何故だか院長が迎えに来るって言うてくれたけど、院長の所有する車は全部、スポーツカータイプでエンジン音がかなり大きい。

だから、控え目に走行したとしても、住宅街を通るとかなり近所迷惑になるから、色々気を使うので丁重にお断りをした。

でも、次回からは深夜なら絶対に院長と一緒に来よう。

で、その院長が私より先にクリニックに来ている確率は五分五分で、微妙な所。

自分は女としては長身の部類ではあるけれど、さすがに一五？近い身長差と、性別と体型の違いからくる筋力差はカバーできない。

“いざとなったら、院長から教えてもらった護身術で逃げよう……”

『抱きつかれたら、まず思いつきり足を踏みつけてやれ。油断したら、素早くかがんで野郎の腕から抜け出して、遠慮なく金的かませ。いつそ、女に変えてやるつもりで、全力で叩き潰せ。男はどいつもこれで撃沈だ』

一応上流階級の人なのに、院長はかなり品の無い事を平気で言う。『丁度そこに良い検体がいるしな』と、男性スタッフの五藤さんを指さして言ったので、彼が自分の股間を押さえて竦み上がって逃げた。

実践はしていないけど、みっちりレクチャーは受けたので、とりあえず相手を油断させてから攻撃すれば逃げ出せる……かな？ちよつと心配。

でも、そんな護身術を教えてくれる優しさがあるのに、深夜に仕

事で呼び出すのはどうにかならなかったのかしら。

高時給の甘い誘惑に乗ってしまったのは、私なのだけれど…。

だってね？

時間給、二倍の特別労働よ？

看護師のバイトの時間給は、普通のコンビニのバイト代よりずっと良いの。

その時給が深夜料の加算された状態で二倍だと、キャバクラの新人キャバ嬢の時間給より良いの。

一生を独身で生きるつもり私にとって、老後のための蓄えは少しでも多いほうがいいからって、考える間もなく即決してしまった私も…やっぱり悪い。

院長の下で働くと、予想外にお金もかかるし。

圧倒的に毎日の洋服代なのだけ…。

勿論、今回の特別業務のお給料を弾んでくれるのには理由がある感じだけど、理由は聞くなと院長に最初に念を押された。

とりあえず、呼び出されたらいつ何時だろうと『絶対に来い』というのが院長の命令。

つまり、訳ありで我が俣の通用するVIPな相手が、診療の相手だと言う事を暗に言われたことになる。

まあ、VIPの対応をするのも初めてではないし、深夜に呼び出されるのもオペ呼び出して慣れてはいるんだけど、この状況は、特別出勤初日にして、既に心が折れそう…。

って、思っているうちに、エレベーターが目的の四階で止まり、扉が開く。

開いた瞬間、相手の男の人が動く。

先に降りていく相手の動きがおかしくて、後ろ姿を見ながらとりあえずエレベーターから降りた。

不審な動きという意味の拳動のおかしさではなく、病態的なおかしさ。

明らかに、足元がおぼついていないし、ゆらゆらして身体が安定

していない。

お酒の匂いはしなかったから、酔っぱらっている訳ではないのに…。

“もしかして、体調が悪いのかしら？”

顔がほとんど見えなかったから、顔色が良くわからなかったけど、何となく放置してはいけないって、看護師としての勘が訴えてくる。ふらつきながら、『榊クリニック』と書かれた、私の職場の入り口でその人は止まった。

すりガラスの自動ドアは開かない。

でも、院内に電気が灯っているから、院長が先に来ているようで、内心ほっとする。

“うちのクリニックに用事？もしかして、院長の言っていた特別な患者さまって、この人？”

うちは睡眠外来が主体の心療内科のはずなんだけど…。  
どう見ても、相手は救急外来で診てもらった方よさそうな感じ。  
必要なら、救急搬送した方が良さそうなのでそれも頭に置いておく。

ピンポーン

壁に肘を付き、腕で体を支えるようにして彼はインターホンを押した。

『なんか用か』

ほどなく、そっけない返事が聞こえる。

“…え、その返事で良いの、院長？普通、どちら様とか聞きませんか？”

応答の対応が悪い事に動揺している私をよそに、インターホンを押した相手は、ぼそりと呟いた。

「俺、さつさと入れてくれ…」

『どこの俺様だ』

「…紫苑だ」

『ああ、知ってる。待ってる』

通話が切れた途端、紫苑と名乗った彼は壁に腕をついたまま、ゆっくりと私を振り返る。

サングラスをしても分かる、日本人離れた顔に、少し驚いた。

“流暢な日本語を喋る美形外国人だわ！”

美形は榊一族で見慣れているはずなのに、その人の整った顔は美形に興味の無い自分でも息を飲んでしまうほど綺麗。

ある意味この美貌は兇器。絢子さんや結城さんが見たら間違いない絶叫するだろうなと思いつながら、相手を観察する。

白色系人種の肌だけど、顔色はそれ以上に血の気がない蒼白状態。疲労困憊した表情で、今にも崩れ落ちてしまいそうな危うさがある。

どこかで寝かせて休ませた方が良いのは、明らか。

「何か用？」

警戒するように、その人は私を見ていた。  
日本語が流暢で助かったかも。

「用があるのは、貴方ではなく此処に、です」

「…此処って…この病院？」

私が指をさした方向を見た相手は、再び胡散臭そうに私を見る。

「ええ。クリニックの職員なので」

「…職…員？」

いぶかる相手に、私はバッグから鍵を取り出して見せた。  
院長が来るよりも先に、自動扉の上下に付いている鍵を開け、手動で扉を開き、立っていることも辛そうな相手を見る。

「とりあえず、待合室のソファで横になってください。顔色が悪いですよ」

何を驚いたのか、今度は相手が驚いた顔をして私を見ていた。

「…大丈夫ですか？一人で歩けますか？」

手を差し出せば、今度は凝視された。

「どうしました？歩くのも無理そうですか？」

「いや…ただ、エレベーターに乗ったら、目眩がしてきて…」

そう言いながら、私の手を取るうと一歩踏み出しかけた相手は、そのまま前のめりに倒れかかる。

“危ない！”

とつさに相手を受け止めようとしたけど、相手が無防備に勢いよく覆いかぶさるように倒れてきたので、相手が頭をぶつけないように支えつつ、そのまま一緒に座りこむように崩れ落ちる。

なんとか頑張って一緒に倒れる事は免れたけど、代償に私は自動ドアで背中をぶつけた。

「いったあ…ちょっと、大丈夫ですか？」

自分の体重プラス相手の体重分の衝撃は、結構きつい。

それでも、相手の安全を真っ先に確認してしまうのは、看護師の性。

彼がぶつけた所はなさそうだが、相手からは返答がない。

意識消失しているようだった。

慌てて、相手の手首にある動脈に触れてみる。

脈拍は規則正しく、緊張もあり良く触知出来る。

呼吸も規則的で、緊急性を要する様子もない。

ひとまず、安心。

「何やってんだ、お前ら」

ほっとしたのも束の間、そんな声が聞こえて院内に視線を向ければ、呆れたような院長が腕組をしてそこに立っていた。

## §

榊紫苑との出会いは、そんな感じで、怖さと痛さに脚色されていた。

何度思い出しても、どう解釈をしても良い思い出ではなかった。おまけに、DSで女に節操のない院長の親族だと聞かされて、げんなりした。

榊一族の女癖の悪さは良く分かっていたし、出逢いの印象最悪のせいで、良い印象がこれっぽちも浮かばなかった。

とどめに、意識を取り戻した榊紫苑の一言が、私の心のフラグを大きく『嫌い』に傾かせた。

「俺に抱きつかれるなんて、ラッキーだね？」

大丈夫かと問いかけた私に対して、「大丈夫」とも、「御免なさい」とも言わず、「ラッキーだね？」…。

人に向かって倒れて来たくせに〜っ！

私の背中はその後、二日間も打撲で痛かったのに！

痛いのを我慢して、院長と運んで処置室の寝台に乗せて、点滴までしたのに！

言うに事欠いて、「ラッキー」？

わがままと傲慢は、上流階級の特権ですか？

それとも超絶美形だからその暴挙ですか！？

特別時間給を貰ってなかったら、相手が真っ青な顔をしていなか

つたら、私は榊紫苑を迷わず殴っていたかもしれない。

それをグツと堪えて、笑顔を返したあの瞬間の自分を褒めたい。でも、「セクハラで訴えますよ？」とは、返答したけど。

「貴女、おもしろい人だね？」

何も面白いことなんて言っていないのに、榊紫苑は青灰色の双眸を細めて笑った。

こういう人種は、適当にあしらってかわして、深く関わらない方が良い。

完全に自分中心でしか物事を考えないから。

その点で、院長と榊紫苑は酷似していた。

だから、特別勤務は付かず離れず、仕事だけを淡々とこなそうと決めた。

その後、榊紫苑も診察に来る度に、顔を見ればあいさつ代わりに一言、口説き文句を言うけれど、それ以外は私が問いかけなければ何も言ってはこなかった。

あからさまに、自分に踏み込まれたくないというオーラも出していたし、いつもピリピリしていた。

気難しい性格なのか、人間が嫌いなのか、近寄りがたい人間ではあった。

彼の特別診療に立ち会うようになって二年、会話らしい会話なんて、ほとんどなかったから、この間のちょっとした会話は、ある意味、画期的な出来事だった。

「吉良、明後日の午後、あいつが来るから準備しとけ」

「…え？」

月曜日の午前診療が終わり、休憩室で院長と向かい合うようにお弁当を食べていた私は、耳を疑う。

榊紫苑が来たのは、昨日。

最初はひと月に一度くらいだったのに、最近は週に一度のペースに狭まっている。

「診察…じゃないですよね？」

「点滴だ」

内科の病院ではないので、こつも頻回に点滴をするのは、レセプト的に色々問題が出るのではないだろうかと思っただけねど…。

「そんなに体調が悪いなら、榊の母体病院に受診した方が良いんじゃないですか？」

「お前が良いんだと」

ししとうの天ぷらをつまんでいる箸で、院長は私を指さす。

「院長、行儀悪いです」

「お前、突っ込む所、そこか？」

「ほかに何があるんですか」

「…紫苑は、お前以外に点滴させたくねえと言っている」

ししとうを頬張りながら、院長は鼻で笑う。

そして、人の弁当箱からだし巻き卵を至極当然のようにかすめ取る。

「ちょっと院長！人のおかずに、手をつけないでください！」

思わず立ち上がって、抗議した私に、院長は出前でとった天ぷらそば定食のえび天をつまんで、私の弁当箱に乗せる。

「文句あるか」

「うっ…ないです」

本当は、ちゃんと院長用で用意しただし巻き卵を全部食べているから、コレステロール値が上がるから駄目ですって、言いたかったけど。

お弁当箱からはみ出すくらい大きな海老が、文句を言うなよと院長の代わりに無言で主張している。

文句なんて言えない…だって、海老、大好きなんだものっ！

上手に口止めされて腰を下ろした私は、勝ち誇ったように私の弁当箱に乗る海老の天ぷらと、院長を交互に見る。

「院長、私の目から見て…榊さんの体調が良くなっているように、どうしてもみえないんですけど」

「俺にも、悪化しているようにしか見えん」

「治療、上手くいってないんですか？」

「正直、お手上げだ」

院長にしては珍しく、気弱な発言だった。

普段の人間性は大いに問題ありだけど、医者として院長は有能だったりする。診療時間帯の患者様に対する院長の態度は、詐欺師。

誰ですか、その優しい声と口調で聖人君主の様な微笑みを浮かべる人は！って、素の院長を知っている人は、誰しも一度は驚くの。

だから女性の患者様が多いのは否めない。

そんな擬態的な変化もさることながら、幼少期から医者としての英才教育を受けていると豪語するだけあって、大方の患者は治療によって、快方に向かう。

多少の憎悪はあっても軽快するし、著しく悪化するようなことはほばない。

今回の様に、目に見えて悪化の一途を辿っているのが分かる事自体がない。

院長が成す術なしだというような事態は、今まで一度もない。

「本来なら、仕事を休ませたい所だ」

「榊さんの仕事、そんなに大変なんですか？」

「気になるのか？」

「ええ…まあ、多少」

榊グループには一切関与していない仕事だとは聞いているけど、来る度に顔に疲労の色が濃いの見れば、いくら嫌いな相手でも気にはなる。

「俺はてつきり、紫苑のことを嫌ってるのかと思ったが？」

「仕事中、表情とか行動に出てました？」

「いいや。ただ、紫苑が来る話をした時は、顔に出る」

無意識に顔に出るくらいだから、露骨なんだろうなあ。

仕事中に出ないように気をつけようと、自分に言い聞かせる。

「嫌いってのは、否定しないのか？」

「しませんよ。でも、それは仕事とは関係ありません」

自分の主観的感情と、仕事は別物。

患者として相手が目の前に立つ以上、看護師としてやるべきことはやる。

それが、私のモットーでもあるし。

「患者さまが苦しむのは、やっぱり嫌ですから…どうにかならぬかなあと」

「良くなりゃ、顔を突き合わす必要もないからな」

嫌みの様に言い放った院長を、私は軽く睨む。

院長は首をすくめる。

「あいつが眠れるようになるには、あいつ自身が癒されねえとなあ」

「ストレスが溜まりやすい仕事なんですか？」

「仕事をしない方が、ストレスなんだよ」

「ワーカーホリック（仕事中毒者）ですか？」

「いや。仕事で限界まで疲弊しないと眠れないだけだ。だからある種、仕事の虫だな」

「スポーツとか趣味で身体を動かすのはどうですか？」

「色々させたが、思うようには効果が出なかった。仕事がない時は過緊張状態になって、睡眠導入剤も安定剤も全く効果がない。恋人でもいればまた違うんだろうが」

「いないんですか？モテそうですけど？」

「お前、仕事で自分を顧みない男と、付き合いたいのか？」

「昔なら、厭だと思えます」

「今なら良いのか？」

「恋愛自体を捨てた身なので、判断できません」

恋愛なんてもう何年してないだろう。

二〇代前半は、院長と美奈先生に散々邪魔されて、恋人と長続きの記憶がない。

二〇代半ばになって、両親のことで人間不信になって、恋愛したいとも思わなくなっちゃったし。

いま最大の関心は、いかに老後の資金を貯めて、お一人様の生活を有意義かつ安定に送れるようにするか。

心が枯れているなあって、我ながら思う。

「若い女が、人生の大半の喜びを捨てるな」

呆れたように院長は、ため息をつく。

人の恋愛を潰しまくった人間の言葉とは、とても思えない。

しかも、人生の大半って、院長はどれだけ恋愛に重きを置いているのだろう。

「残念ながら、私の老後に必要なのは、愛じゃなくてお金ですから」

「どつせなら、欲張って二つ手に入れる」

「贅沢な無茶振りですね」

心配されているのか、邪魔されているのか、正直分からなくて、  
思わず苦笑いしてしまった。

「…で、話がそれましたけど…。榊さんは、人に弱みを見せたがらない性格ですから、恋人がいても、あまり現状と変わらない気がしますけど」

「どうして、紫苑の性格が分かった？そんなに、話もしてないだろ」「点滴をしている時に、もしかしてそうかなって」

「点滴？」

「榊さん、くけつたい駆血帯を巻いた腕に必要以上に力が入っているし、針を刺した後は、異常なくらい掌に汗をかいているんです」

「それがどうした」

「注射や点滴が嫌いな人に、良く見られる特徴なんです。でも榊さんは顔色一つ、態度も全く変えずに表面上は平静を装っていました」「それだけで判断するのは早計だろ」

「やせ我慢は、私が知る榊一族全員に共通する性格でもありますから」

不意に、院長が唇の端を緩める。

「お前に読み取られるようじゃ、榊の一族も脇が甘い」

自分が貶されたのか、判断に困る微妙な言葉だった。

あえて何も言わない方が良い気がして、再び箸を動かしはじめた。院長も、何も言わず同じように食事を再開する。

静寂の中、お弁当を食べながら、私はぼんやりと考えていた。

院長が、榊紫苑の話をつつもはぐらかす理由を。

恐らく、意図的になされているそれは、私が特別時間給で働く理

由につながっているのだろうと思う。

だからこの二年の間、深く話を掘り下げて、院長に聞くような真似もしてこなかった。

榊紫苑に直に問うことも、意図的に避けてはきた。

良いアルバイトを失うのが、厭だっというのが大きな理由だけど、それ以上に、深入りするなど、彼らに見えない境界線がある様に感じていたから。

榊紫苑に対する第一印象もあつたから、余計に触れてはこなかったけど。

でも、最近の榊紫苑の様子を見ると、それではいけないような気もしてきた。

少しやつれているし、顔色もずっと悪いまま。

彼の治療は、院長にしては珍しく思うように進んでいない。

普段なら、常勤で来ているカウンセラーさんと連携もするのだけれど、時間外にこっそりやってくる榊紫苑にはそれも出来ない。

駄目もとで、一度、榊紫苑と話をしてみようかな。

彼が心を開いて話をするとは、到底思えないけれど。やらないよりはまし。

「…どうした」

院長の声に、はっとして顔を上げる。

お弁当を見つめたまま、手を止めていたらしい。

「なに海老天と見つめあつてんだ」

「いえ…ダイエットの為に衣を外して食べるか、欲望に任せてそのまま食べようか迷ってました」

院長に言えば、余計なことをするなって言われそうな気がして、あえてそうはぐらかす。

「遠慮なく欲望に溺れる。ダイエットなんざ考えなくても、必然的に痩せるように仕事を振ってやる」

「…鬼ですね」

「愛だと言え。うちの社員規定、忘れた訳じゃないだろうな？」

その言葉に、うつつとなる。

うちのクリニックは院長の独断と偏見で、男女問わず職員は、かなり容姿の綺麗な人がそろっている。

私の容姿は例外としても、美人どころが揃っているし…：どこの社員規定に、個人個人に対してスリーサイズのアウトラインを設ける所がありますか？

妊婦さんになった場合は除外だけど、規定を超えるサイズになったらクビとか、あり得ない。

しかも、スリーサイズを見ただけで言い当てる院長に、偽りの自己申告など無意味だし。

院長曰く、体形変化は日々の自己管理ができていくか否かを、視覚的に簡潔に判断する事が出来るから…らしい。

容姿に対するこだわりは強いけれど、仕事能力の無い外見だけのナルシストな人材は絶対に入れないから、院長の審美眼は侮れない。痩せすぎも「醜い」と言われるので、ベストバランスの維持は難しい。それでも体型維持を意識的に努めているせいかな、職員はほぼ風邪ひとつ引かないから、健康管理にも役立つているみたい。侮れないわ、院長…。

「雑用係のお前に抜けられると、俺が面倒だからな」

「…『雑用係』を強調して言うの、止めてくださいよね」

「わがままな女だな…ともかく、明後日の午後は残れよ？」

「分かりました」

わがままは貴方の専売特許でしょ？と、言いたいのを飲みこんで、私は海老天を箸でつまみ、大きな口でかじりついた。

第三章 二人の俺

「お、伊織じゃ〜ん。久しぶり」

雑誌の表紙撮影が終わった後、控室に戻ろうとスタジオの廊下を歩いていた俺を、神埼亮かんざきりょうが呼びとめた。

亮は中性的な顔立ちで、しかも童顔。体型は華奢で、身長は平均値。

一見すると儂げな印象の男だが、ロックバンド『belladoペラドonnaンナ』のボーカルをやっている。

見た目に反して、性格も歌い方も、バンド活動もかなりアグレッシブ。

同じ事務所に所属している縁もあって、俺の二つ年上だが、良くつるんで遊ぶ仲間でもある。

「亮？何でお前が此処に？」

上坂伊織の時は、榊紫苑の時と違い、自然と言葉づかいや声音が変わるから、我ながら不思議だ。

「今度ソロで新曲出すから、これからそのインタビューと雑誌用の撮影…って、お前、なんか痩せたか？」

亮が不思議そうに俺を覗きこむ。

最近、食事も満足にしていけないから、体重がかなり落ちた。けど、それを人に言うことはない。

「ああ、すこし体を絞りこんでるからな」

「それなら良いけど。最近お前付き合い悪いから、調子悪いのかと思ってるさ」

「違う。小さい仕事が多くて、時間が合わないだけだ」

「じゃ、伊織はいつ暇だ？」

「そうだな…今日はこのまま私用があるから無理だな。一週間くらいすれば、夜は暇になる。何かあるのか？」

「あ？俺の連れの仲間に、お前のファンって女がいるんだ。そいつがお前に会わせろってうるさくてな」

思わず、失笑が零れる。

つまり、亮とは何のかかわりもない他人ってことか。

亮の表情からして、乗り気ではないのがわかる。

俺も同じように亮を紹介しろと言われたこともあるし、何となく、亮の今の気持ちは分かる。

「亮、俺の事ちゃんと言ってるだろうな？」

「遊びでしか付き合わねえし、二度はねえって？言ってるぜ？それでも良いからとか、何遍断ってもしつこいから、マジウザくて。」

野郎ならぶん殴れるのによ」

亮の直接的な知り合いなら、顔を立てて会うのは構わないのだが。

正直、初めからつまみ食いされることを希望して、礼儀知らずに強引に会わせるとか言う女は、下手に断っても、引き受けても面倒くさい。

だから亮も、断りつつも、俺に話を持ってきたのだろう。

「俺に彼女がいるから、無理って言っというて」

その一言に、亮の二重の双眸が驚きに見開かれる。

「お前が、女を一人に絞り込む？あり得ねえ、ってか、信用されねえだろ」

笑いながらバンバンと俺の腕を叩く亮に、俺は首をすくめる。

そんなにあり得ないことかと、ちょっと自問してみるが、確かに不似合いな気はする。

俺が女に本気になるなんて。

だが、それを亮に見透かされているのは、癪に障る。

「だいたい、本命の女なんていないだろ」

「俺の心を二年間、ずっと占めている女なら居るぞ」

「…うっそ！」

大げさに驚いて見せた亮に、俺は鼻で笑う。

こいつをからかうと、おもしろいから好きだ。

もっとも、俺は嘘を言っではない。

ずっと気になっている女性ならいる。

恋愛感情ではないけれど。

「何、片思い？プラトニック？お前が？マジか！お赤飯炊くか！」

なんだ、そのお赤飯って。

祝い事レベルの話か？

「よし、分かった！女の方は断ってやるから、その話、今度、じっくり聞かせるや。赤飯食べながら聞いてやっから！」

いや、何も分かってないだろ、亮。

しかも、赤飯からいい加減、話を逸らせ。

そんなに赤飯が食べたいのか、お前。

そう突っ込みたかったが、あまりに純粹に喜んでいる亮がおもしろくて、そのまま話を否定もせず、今度、食事をする約束をして別れた。

## §

マネージャーの熊井くまいが運転する車の後部座席に、俺は座っていた。スモークガラスが張られた車内で、俺はカラーコンタクトレンズを外し、スーツからラフな格好に着替えを済ませた。髪型も少し崩して、服装に合わせる。

「伊織いおり、その恰好すると、全然別人だなあ」

ルームミラーで俺の姿を確認した熊井が、鏡越しに人好きのする笑みを浮かべる。

学生時代、レスリングをしていた熊井は俺と同じくらいの身長に、かなり厳つくて怖い風体だが、気が優しく気の良くつくマメな三十路男だ。

「目の色が違うだけで、結構印象って変わるし」

「見慣れないからだろ」

「それにしたって、よく化けてる」

「上坂伊織かみさかいよりが医者通いなんて、記事は嫌だからな」

仕事中は、ヘイゼルカラーのコンタクトを入れているが、俺の本来の瞳の色は、ブルーアッシュ。今はカラーコンタクトを外している。

髪もダークブラウンに染めているが、地毛はブロンド。

眉や睫毛も合わせて染めるのが、結構面倒くさい。

仕事がらみだからそうも言っていられなくて渋々、マメに手入れはしている。

髪の色だけは、個人的な外出するときはウィッグを使ってみたりする。

変装気分で、これはこれで楽しめる。

「こうして見ると、伊織に似た外国人って感じだな」

「クマモカラコンすれば？その体格なら、外国人に間違えられるぞ」

「純日本人顔の俺がそんなものをして、気持ち悪いだけだろ」

「意外と似合うかもよ？」

「いや、遠慮しとくよ」

熊井は力なく笑いながらそう答え、しばらく無言で車を運転する。

「しかし、今の医者でいいのか？伊織、全然良くなってないだろ？」

「…良くなってないのは、十年前から同じだ。今に始まったことじゃない」

もつとも、熊井が俺のマネージャーになったのは四年前で、それより以前のことを熊井は知らない。

昔は私生活からして荒み過ぎていたから、これでも随分、大人しくなつてまともになつた方だ。

「他の医者は悪化しかなかった。今の所は現状維持できる上に、点滴が上手い看護師がいるからそれで良い」

「まあ、腕が痣だらけにならなくなっただけ、ましな気はするけど…俺は、あんまり不眠症の治療つてのは分からないからなあ…」

何か変な病気かと思われるくらい、腕に痣を作っていた頃の俺を

知る熊井は、複雑な顔をした。

「それに古い付き合いの医者だ。俺の事を口外する真似もしないし、何かと融通も利くから楽なんだよ」

「お前が良いって言うなら、良いけど…無理するなよ？」

「大丈夫だ…お前こそ、俺の体調気遣って、こつそり仕事量を減らしてるだろ。上から言われないか？」

「伊織がぶっ倒れたら、話にならないだろ？その辺は、上手く上に話をしてあるから。とりあえず元気になってくれよ」

「…努力はするよ」

努力でどうにかなるのなら、医者なんていらないけどな。

ここ十年、心地よく眠れた記憶はない。

疲れきって、意識を失うようにわずかに眠るか、浅い眠りで訳のわからない夢をエンドレスで見続けてぐったりするか。

眠ることが苦痛で仕方がない。

けれど眠れないと、記憶力が落ちる。

仕事に影響するのが、不眠の最大の難点だ。

俺は、ビルの群生する狭い空を、何となく見上げる。

久しぶりに見る真昼の太陽は、相変わらず主義主張の激しい熱さをまき散らす。

夏らしい夏を過ごさなかった俺に、まるで夏を味わえとばかりにジリジリ照りつけてくるようで、うつつうつしい。

暑苦しいのは嫌いだ。

暦の上では初秋に差し掛かったのだから、暑さも太陽も大人しくなれば良いのだ。

思わず舌打ちし、その音ではっとなる。

「…マジか」

「どっつした？」

「なんでもない」

額を抑えながら、深いため息が漏れる。

くだらない事で苛立った自分自身に、呆れた。

健斗の経営する病院から少し離れた所で車を降り、俺は時間つぶしの為に近くにあったコンビニに入った。

まだ一三時少し前。

健斗と約束をした時間には、まだ時間がある。

今日は平日だ。あまり早く行つて、余計な職員と顔を会わせたくなかったから、何を買う訳でもなく、時間つぶしで少し店内を見て回る。

こういった場所にすら滅多に入ることはないから、見ているだけでもわりと面白い。

最近は、ATMがコンビニの中にあるとか、栄養ドリンクが売られているとか、弁当もわりと種類が豊富なんだとか、俺がCMに出た事のある菓子があるとか…

そんなことを思いながらぶらぶらする。

“あれ…”

ペットボトルの陳列してある冷蔵庫の前に、見慣れた白衣の後姿がある。

すらつとした長身に、ショートの子。

俺はそつと、相手に近づいてみる。

ガラス扉越しに映る相手の顔を見て、当人だと確信する。

彼女は何やら真剣に、陳列されたペットボトルを眺めている。

「不経済だわ…」

ぼそりと呟いた彼女の隣に、黙って立つと、相手は不思議そうに俺を見上げる。

「わっ、さ、榊さん！何で…」

一歩身を引いて、心底驚いた顔をする吉良に、俺も驚く。  
そこまで驚くようなことなのか？

「…何が不経済なの？」

「コンビニ二つて、スーパーと比べると、どうしても値段が高いんですよね…」

「そう？」

俺はコンビニでも、スーパーでも買い物をほとんどしないから、どう違うかなんてさっぱりわからない。

「で、何を買うつもりだったの？」

「院長の食後のコーヒーを点てるためのお水です。お水の銘柄を変えると、途端に機嫌が悪くなるので…」

そう言いながら、ガラス張りの大きな扉を開き、二リットル入りのミネラルウォーターを手にとって、買い物籠に入れる。

「榊さんは何を買われるんですか？」

「俺は良いの。時間つぶしだから」

「時間潰し？」

「約束した時間より、ずいぶん早く仕事が終わったから」

「そうなんですか…お昼ご飯はもう食べられました？」

「あ…まだだけど」

吉良は、不意に破顔する。

「よかった。院長に言われて、お弁当を三人分作ってきてたんです」

普通、単なる看護師が医者に言われたからって、そんな物を作って持ってくることなんてないよな？

健斗にいたっては、そもそも女の手料理は嫌いなタイプだ。

俺が知る奴の歴代の彼女にすら、手料理を作らせない。

作られても、絶対に食べない男だ。

一体、健斗と吉良の関係はどうなっているのだろう。

この間は、否定していたけど、どこか怪しい。

不倫していようが恋愛していようが、特殊な関係だろうが、俺には関係の無い話だから、普段はあまり他人に対して興味がわからないけど、吉良のことはどうしてか気になる。

俺の周りに居た女とは、どこか違うせいかもしれない。

「たぶん、榊さんは何も食べずにくるはずだし、自分は忙しくて外で食べる時間もないからって、ほぼ脅迫的…あ、いえ、何でもありません」

レジへと歩きながら、俺に説明していた吉良は、途中で言葉を濁した。

困った顔をしているあたり、本当に脅迫まがいに命じられたのだろう。

レジで会計を済ませ、長財布に小銭とレシートをしまっている吉良を見ながら、俺はレジ袋に入れられたペットボトルを手にとって、先にコンビニを後にする。

その後を、吉良が慌てて追いかけてきた。

「榊さん、すいません。荷物持ちます」

手を差し出してきた吉良に、俺は立ち止り、手をのばして吉良のその細い手を握る。

吉良が一瞬、その握った手を見て固まり、俺を見上げてきた。

「これは、何の冗談でしょう?」

「女の人に荷物を持たせるなんて、男のことじゃないでしょ」

「そうじゃなくて…」

つながった手を持ち上げ、吉良はそれを強調するよつに振る。彼女の表情が、どことなく険しい。

「これです、これ」

「なに？指をからませる、恋人つなぎの方が良かった？」

「…違います。どうして、手を繋ぐんですか？」

「出された手を、手ぶらで返すのも何だから」

呆れたような顔をして、吉良は俺を見る。

「その発想が分かりませんから。素直に手を離して、荷物を下さい」

「やだ」

「…その返事は、私が嫌です」

この俺と手を繋いでいるのに嫌だなんて、一体、吉良の感性はどこを向いているのだろうか。

女性受けは良いと自負しているだけに、吉良のこの反応は俺の自尊心を傷つける。

「っ、ちょっと、柙さん!？」

俺の手を一生懸命振りほどこうとする吉良の手を引くように、俺は歩き出す。

初めは少しだけからかって遊ぶつもりだったけど、気分が変わった。

照れるか、少しでも嬉しそうな顔をしたら、すぐに手を離すつもりだったけど、露骨に嫌そうな顔をされると、意地でも離したくない。

「さ、榊さん、ほんとに困ります…うわっ、まずい」

吉良は手をつないだ恰好のまま、不意に俺の背後に隠れて止まる。俺は彼女のせいで後ろに引っ張られ、吉良とぶつかるようにして立ち止る。

俺に背を預けるようにした吉良が、「だから、困るって言ったのに…」と、力なく呟いている。

何事かと思い前方を見れば、あんぐりと口を開けた女がいる。年齢は三十代半ば、一般人としては文句なしに洗練された華やかな容姿をしている。

「…誰？」

「同僚です…」

吉良が答えると同時に、少し先にいた女性が駆けてくる。女性はものすごい勢いで駆け寄り、俺の背後に回り込む。

「あげはちゃん、何で隠れてるのよっ!」

“あげは? ああ、名前か”

期せず吉良の名前を知った俺は、吉良に向き直る。手は繋いだまま。

「やだもう、彼氏と制服デートなんて、マニアックすぎよあ〜」

「あ、絢子さん、痛い…」

絢子という女性に、肩をばしばしと叩かれ、吉良は困った顔をす  
る。

「彼氏なんていないって言ったのに、あげはちゃんだったら」

「あの…絢子さん…この人…彼氏じゃ…」

「またまたあ！こんなイケメンと、手つなぎデートしながら何言っ  
てるの。ほれ、お姉さまに紹介してごらんなさい」

何というか、あまり人の話を聞かない感じが、俺の苦手な人に似  
ている。

俺は、相手に愛想よく笑みを浮かべる。すると、相手は俺の顔を  
まじまじと凝視する。

「…貴方、上坂伊織に似てるわね？」

一瞬、背筋が冷える。

そう言えば、健斗が『受付の絢子』という女性が、俺のファンだ  
と言っていたな。

多分、この女性がそうなのだろう。  
とりあえず、かわさなくては。

「What? Say it again」

首をかしげて尋ねると、一瞬にして相手は固まる。

おおよその日本人は、流暢な英語で問われると思考回路が停止す  
る。

「絢子さん、この人、日本語が通じないみたいで、手を離してくれ  
ないの…助けて？」

俺に話を合わせてはくれたけど、本当にこの状況を何とかしてほしいのか、吉良の言葉は相手に縋る様だった。

「む、無理無理無理っ！失礼しますう」

「あ、絢子さん……」

勢いよく踵を返した相手は、猛ダツシュで走り去った。  
思惑通りだ。

悲壮感たつぷりの表情で相手の後ろ姿を見送っていた吉良は、ちらりと俺の方を見る。

物言いたげな表情で俺を見た後、深いため息と共に視線を逸らす。

「はぁ…絶対、絢子さんに勘違いされたわ……」

「俺が相手じゃ不服？」

「不服以前に、セクハラですから」

「手を繋いだけだけ？」

「セクハラって言うのは、受けた側がそう感じたら、確定するんです」

つまり、俺にこうされるのは不愉快だと言う訳だ。

嫌がられているにも関わらず、俺は何故だか愉快的な気分だった。

記憶のどこを辿っても、女性から拒まれた記憶がない。

こういふ吉良の反応は、新鮮でいい。

「いい加減に、離してくれませんか？」

「嫌だつて言ったら？」

刹那、クリニツクのある方に顔を向けていた吉良の表情が歪む。

口角を緩やかに釣り上げたそれは、いつも仕事で見せる人好きの  
する微笑み。

「…院長の点滴、痛いでしょうねえ…」

ぼそりと呟かれた言葉に、思わず俺は吉良から手を離れた。

吉良はそのまま一人で歩きだす。

“なんだ？まさか、俺が注射苦手だつて、気付いているのか？”

単に、注射の下手な健斗に点滴をさせようと目論んでいるだけだ  
ろうか。

いずれにしても、ただの牽制にしては悪意を感じる。

心臓が早鐘を打つて、嫌な汗が止まらない。

これまでの優しく人当たりの良い印象など、一瞬にして消し飛ん  
だ。

考えてみれば、わがままな健斗の下で屈せず働けるくらいだけか  
ら、単に優しいだけの弱い人間ではないはずだ。

“これだから女は怖い”

色々な意味で、吉良は俺の予想を裏切ってくれる。

「榊さん。水を早く持って帰らないと、院長に叱られてしまうんですけど」

少し先で足をとめた吉良が、俺を振り返る。

普段と変わらぬ表情で。

彼女の手は、俺に差し伸べられる。

それは、レジ袋を渡せと言っているのだろう。

吉良も意外と、頑固な性格をしているが、俺も俺の信念を曲げるつもりはない。

俺はそのまま歩き出し、立ち止まっている吉良を追い越していく。

「あ、ちよつと、榊さん！」

少し大股で歩けば、歩幅の少ない吉良が少し早歩きで付いてくる。

「袋、持ちます。貴方に荷物を持たせたら、院長に叱られます」

「そう言うのなら、賭けてみる？」

歩きながら吉良を見れば、彼女は不思議そうな顔をしている。

「賭ける？」

「俺は、俺が荷物を持っていても、健斗が文句を言わない事に賭ける。吉良さんの予想が当たっていたら、俺は吉良さんの言うことを一つだけ、聞くよ」

「そんな一方的」

「勿論、俺の予想が正しければ、吉良さんは俺の言うこと、一つ聞いてよ？」

「…それって結局、榊さんが荷物を持つ事になりませんか？」

健斗も女に荷物を持たせるような真似はしない。この賭けは必然的に俺の勝ちだけど、吉良は単純にまだ俺が荷物を持つことにこだわっている。

自然に、自分の顔に苦笑いが浮かぶのがわかる。

俺の周りにいる女は、大抵、男に持ち上げられることに慣れていて、男を道具程度にしか考えていない。

荷物を持たせることになど、一抹の疑問も浮かべない。

吉良はなんとというか、男への甘え方を知らない。

男慣れしていないのか、可愛げのない性格なのか…それとも。

「健斗に怒られるのが嫌？」

「そうではなくて…顔色の悪い人に荷物を持たせるのは、看護師としてはちよつと…それに、院長は貴方に荷物を持たせた事を叱ると思いますから、たぶん、私の方が賭けに勝つと思います」

言い辛そうに、吉良は答えた。

言われて俺は自分の顔に触れる。

「俺、顔色悪い？」

「…もしかして、自覚ないんですか？」

つまり顔色が悪いから、持たせるのは嫌。そして、自分が賭けに勝つから嫌。という構図なのか。

“なんかムカつくな”

何故ムカついたのでか、自分でも分からず首をひねる。

「あー！」

吉良が思わず声を上げ、俺は吉良の視線の先を見る。いつの間にか、俺たちは吉良の勤め先のあるビル近くにいた。ビルの入り口で、俺たちを見ている男の姿がある。紳士的な服装をしているのに、煙草を啜えながら不機嫌丸出しの従兄弟は、さながら暴力企業の若頭の居住まいだ。

「遅い！俺のコーヒーを早く淹れろ」

吉良を見るなり、コーヒー中毒の健斗がそう言い放てば、吉良は苦笑する。

「コーヒーがないと、院長、いつもこんな感じなんですよ」

そう言えば、昔健斗が一人暮らしをしていたマンションに居候した時も、コーヒー切れを起こすと良くキレていた。

健斗は、キレると口より手が出る。そのせいで、それで何度か俺も健斗と殴り合いの喧嘩になった覚えがある。

今は文句を言う程度なのだから、健斗にしたら随分良心的なキレ方だ。

男と女でキレ方が違うのは、流石、フェミニストと言った所だ。

「あれならまだマシなレベルだよ。酷くならないうちに、コーヒー飲ませてやって」

「荷物、運んで下さってありがとうございました」

吉良はそう言って、俺が差し出した手からコンビニの袋を受け取って、ビルの中へと小走りで入っていく。

健斗は携帯灰皿に煙草を押しつけて火を消し、近付いた俺を見る。

「そんな顔色をしてる時くらい、吉良に荷物を持たせとけ」

「は？健斗、熱でもあるのか？」

「莫迦か、お前は。少しは自分の体調くらい自覚しろ」

従兄弟にそう言われて、睨みつけられた。

まさかの俺叱られで、俺は自分が提案した賭けに負けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3185x/>

---

Parfum

2011年10月21日09時02分発行